

---

# 仮面ライダーディシジョン

ウボアー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーデイシジョン

### 【Zコード】

Z2612X

### 【作者名】

ウボアー

### 【あらすじ】

一年の天気が雷雨という異質な都“雷都”。

この街に住む左翔太郎の双子の弟“左翔一郎”。

彼は探偵、科学者、そして仮面ライダーデイシジョンなのである。

・・・こんなあらすじでいいのだらうか あらすじとは関係ない

注意：更新が遅いです。“了承ください”。

プロローグ 2008年9月某日 22時00分（記書き）

ひょっとしたら描画の間違いがあるかもしれません、その時は報告をお願いします。

プロローグ 2008年9月某日 22時00分

2008年9月某日 22時00分

都会から遠く離れた孤島にあるビルの最上階。

ここには二人の青年と一人の男がいた。

一人の男の中で白いソフト帽を被った方の男は、目の前にいる少年の手を掴み、肩を組んだ。

すると、急にビルの警報が鳴り響き、窓からはくり「プロターの明かりが差し込んできた。

「おやつさん……」

青年は、ソフト帽の男に向かって叫ぶと、急いで男の方に向かった。煙草を吸っていた男も危険を察知し、最上階を出ようとした。しかし、気づけば謎の黒服達に周りを囲まれていた。

「俺が足止めをする。お前らはとどとその子供を連れていけ」

煙草の男はそう言い、上着のポケットから何かを取り出し、そして

“変身”した。

右手首に着けておいた小型カメラのスイッチを切つて。

なぜ男がそんな物を着けていたのかは分からぬ。

一方ここ、 “雷都” にある探偵事務所では。

「おい！探偵！てめえ何勝手にスイッチ切つてんだ！おい！おい！」

相棒の帰宅を待つ、一人の科学者がいた。

## ライターの設定（前書き）

他にもライダーが出てきたら追記します。

## ライダーの設定

### 仮面ライダー＝ディシジョン

#### スペック

- ・パンチ力：7トン
- ・キック力：10トン
- ・走力：100mを2秒

#### 武器

- ・ディシジョンサイズ（大鎌）

柄の色は黒で、柄の下にマキシマムスロットが付着

- ・一振り12トン

#### 詳細

- ・左翔一郎が“審判の記憶”を宿したガイアメモリ“ディシジョンメモリ”をロストドライバーに装填して変身
- ・Wと同じくWの触角
- ・複眼の色は紫
- ・体色は白で、肩、肘、膝に黒の装飾がしてある
- ・ディシジョンサイズは翔一郎の意思によって出現と消滅が可能
- ・Wが“風都の涙を拭うハンカチーフ”ならディシジョンは“雷都の審判者”
- ・他にも“白い死神”という異名がある

## キャラ設定（前書き）

新キャラや物語の内容で新たな事実が出てきた時に更新します。

2011年10月31日 更新

## キャラ設定

左翔二郎 年齢：左翔太朗と同じ 職業：探偵と科学者  
この物語の主人公。

左翔太朗の双子の弟。

『ディシジョン』のガイアメモリを持ち、仮面ライダー『ディシジョン』に変身する。

雷都で探偵事務所を開いており、その一方で色々な物を発明している。

元々は相棒がいたようだが、その相棒は・・・。

翔二郎の相棒（今のところ本名不明）名字：草野 年齢：48歳

職業：探偵

翔二郎の相棒であったが、2008年の9月某日に行方不明になつた。

変身能力を持つていいようだが、今のところどのような用途で変身するのか不明（恐らくガイアメモリで変身する）。

雷都の探偵事務所はこの男が開いていたらしい。  
常に煙草を吸っている。

名字は草野。

平井大介 年齢：27歳 職業：警部

若くして警部になつたエリート。

卵が何故か割れない。理由は不明。

翔二郎に何か作つてもうつ。

草野の事を知つている。

## 依頼編（前書き）

ついに本編投稿。

誤字などがあつたら感想欄に書いてください。

### 第一話　ロの記憶／三つの顔を持つ男

ここは一年中雷雨が降っている“雷都”<sup>らいじと</sup>。  
何でこうなったのかは誰も知らない。

2009年9月1日 雷都 15時00分

雷都にある探偵事務所。

この探偵事務所を訪ねる二十歳の青年“水野亮”<sup>みずのりょう</sup>がいた。

水野は、探偵事務所のドアを叩いた。  
しかし反応がないので、もう一度ドアを叩いた。  
また反応がないので、声を出す水野。

「依頼でーす！入つてもいいですかー！」

反応なし。

「入りますよー！」

そう言い、中に入る水野。

そこには、科学者のような服を着た二十代前半ぐらいの青年が何かを作っていた。

「よし・・」二つの名前は『全自动卵割り器』だ！

「・・・」

「あれ、どちら様ですか？」

「・・・依頼です」

「ああ依頼ですかー少々お待ちください  
「はい」

と言い、部屋にあつたソファに座る水野。

青年は部屋にあつたドアを開け、別の部屋に行つた。  
おそらく着替えに行つたのだろう。

「・・・

特に何もすることがないので、とりあえず部屋を見回す水野。  
部屋はそこそこ整頓されてあり、これといつて目立つものは無かつ  
た。

・・・先程の青年が座つていた本の山を除けばの話だが。  
目を凝らすと、そこには『事件ファイルN.O.・1』と書かれたもの  
もあれば、『発明品ファイルN.O.・1』と書かれたものもある。

「（あの人は今まで多くの事件を解決したのだらう）  
と、水野が推測していると、その隣に、『代理探偵 左翔二郎』と  
書かれたプレートが置いてあつた。

「（一体なぜ？元々は誰かがやつっていたのかな・・・？）  
水野が不思議に思つていると、部屋のドアが開いた。

先程の青年が服を変えてその場にいた。

「お待たせしました！」  
「あ、いえいえ」  
「何か飲みます？」  
「いや、いいです」

上のようなやり取りを終え、丁度向かい側にあつたソファに座る青

年。

「・・・で、依頼は何ですか？」

「はい。・・・友達を探してほしいんです」

「そうですか。警察には相談したんですか？」

「一応しました」

「分かりました。・・・自己紹介がまだでしたね。俺は“左翔一郎”です。副業で科学者もやつてます。あなたは？」

「水野亮です（副業で科学者！？この人凄いんだなあ・・・）」

「水野さんですね。・・・じゃ、質問します」

と言いながら、ポケットからメモ帳を取り出す翔一郎。  
長いので質問のシーンはカットします。

「「ちよ」」

数分後、翔一郎のメモ帳にはこう書かれていた。

『依頼人・水野亮（20） 男性 職業・大学生

依頼内容・弟の水野武（22）を探してほしい。

依頼人によると、水野武は数年前、受験した大学に全て落ち、それ以降は毎日自宅で引きこもっているとの事。

全く、落ちたなら落ちたで就職しろと言った（以下作者が自虐）しかし、数日前から突然姿を消した。

推測だが、これは数日前から突然起きたドーパント事件に関係していると思われる。

いずれにしろ、早い内に解決しなければならない。

2009年9月1日 左翔一郎』

「（大体こんなもんか）さて、質問も終わつたことですし、帰つて

いいですよ

「分かりました。・・・左さん、なるべく早く解決してください。

お願ひします」

「はい・・・」

そして、水野は事務所を出て行つた。

「（・・・一年たつても慣れねえなあ。探偵の仕事は）」

水野が出て行くと同時に、声には出さず愚痴を言つ翔一郎。

「（一年といえば、そろそろ探偵がいなくなつて一年だな。・・・  
今月で）」

翔一郎は自分が探偵にも関わらず、おかしなことに別の人物を探偵と言つている。

まるで、一年前までその人物が探偵をやっていたかのような口ぶりで。

「本當、どこに行つちまつたんだ・・・探偵」

その一言を、翔一郎は声に出して言つた。

## 調査編（前書き）

翔一郎が前の話で言っていた“探偵”的名字が明かされます。

## 調査編

同日 雷都 16時00分

「さて、行くか」

翔一郎はそう言い、自作の自転車に乗った（黒いレインコートを着ている）。

“仮面ライダー”とタイトルにあるのに、バイクに乗らないのはどうかと思つ。

「俺の勝手だろ」「まあそりだけどさ。

同日 雷都 16時10分

翔一郎は、『KEEP OUT』と書かれたテープの前にいた。テープの向こう側は、建物が焼失していた。

テープの向こう側にいた人物に声をかける翔一郎。

「ヒラー。例の物持つてきたぞー」「翔一郎か。こいつは通していいぞ」「はい！」

どうも、と言い、中に入る翔一郎。ヒラと言わされた人物の名は“平井大介”。あだ名はヒラ。年齢は27歳。名字とあだ名に似合わず、若くして警部になつたエリートだ。

「で、例の物は？」

「焦るなよ。ほれ」

「これが『全自动卵割り器』か。俺は卵がどうしても割れないんだよなあ」

「（お前が言うと笑えるな）」

「ほれ、仕事代」

「おう。・・・今度の大学で何回目だ？」

「確か六つだ。って、何でそんなこと聞くんだ？」

「仕事と関係してるんだよ」

「あー成程。にしても、今度のドーパントは働き者だな」

「この十日間で六つも大学を焼失させてるからな」

「こ」でドーパントが何者なのかを説明しないと、永遠に説明する機会を失うと思うので説明をする。

ドーパントとは、人がUSBメモリのような形のガイアメモリという物を体の一部に差し入れ、その姿を化け物に変えたものである。

「メモするか」

翔一郎は、メモ帳 探偵事務所で使ったのとは別物の物だが を取り出した。

表紙には、『ドーパントファイルNo.・1』と書いてある。

翔一郎はメモ帳にこう書いた。

『ドーパントの攻撃跡を発見。

大学が焼失していることから炎系のドーパントと思われる。

2009年9月1日』

「・・・そういうや、草野さんはまだ見つかっていないのか？」

平井がいきなり言った。

「・・・探偵ならまだ見つかってない」  
「そうか。・・・行方不明になつて一年だな」  
「そうだな。・・・警察はまだ探してるので  
いや、・・・既に死亡扱いになつてる。まあ生きてるだらうけど  
な」

「マジで死んでるかもな」  
「縁起でもない事言うなよ。・・・何してるんだか、あの人は」  
「どつかで煙草でも吸つてるんじゃねえの」  
「だといいけどな」  
「・・・じゃあな」  
「おう。今度も何か作ってくれよ」  
「ああ」

翔一郎はそう言い、探偵事務所に帰つた。

**調査編（後書き）**

感想待つてます。

**推理&a m p;変身編（前書き）**

つこじ変身シーンキター！

## 推理&ampo;変身編

雷都 探偵事務所 16時30分

「（さて、調べたことをメモするか）」

探偵事務所に帰り、例の『事件ファイルN.O.-1』や『発明品ファイルN.O.-1』が置いてある机の近くの椅子に座つてメモをする事にした翔一郎。

『まず、依頼人は水野亮。兄の水野武を探してほしいという依頼だつた。

水野武は数年前大学に落ち、以降は働きもせずに引きこもつていた。しかし数日前に突然姿を消した。

数日前という点で一致するのは数日前から起きている『連續大学焼失事件』だ。

俺は現場に行き、この田で大学が完全に焼失していることを確認した。

この事から、大学を焼失させたドーカントは炎系のドーカントと断定。

恐らく水野武は、この事件に関わったか、もしくは犯人のドーカントと思われる。

もし犯人だった場合、どのようにガイアメモリを入手したかは不明

「・・・こんなもんか」

調べた事をメモした翔一郎。

「（水野武が犯人だった場合、次も大学を焼失させるだろう。だったら、まだ燃やされていない大学が危険だ。）

その大学を見張るか』

椅子から立ち上がり、隣の部屋に入った翔二郎。

「（・・・ドーパントを倒すにはあれが必要だが・・・どこ行った？探すしかないが探すのには時間がかかるな。

この部屋じゃ）』

部屋は、・・・整理整頓とはかけ離れていた部屋だった。

入ると同時に、足元には変な物（翔二郎曰く失敗作）が転がっており、一つの机の上（ちなみに何個もある）には資料や本の山。先程の部屋の資料はほんの一部だつたようだ。

壁には紙が貼りつけられており、最早紙の壁と言うにふさわしい。別の机には起動したまま置かれてあるパソコンがある。

電気代が勿体ないと言いたい（翔二郎は事務所の屋根に当たる雨粒をなんやかんやで電気に変換している装置を作ったそうだ。雷が落ちると大きな電氣になると言つていた）。

「よくここまで散らかしたものだ・・・今度掃除でもするか」  
ぼやきながら翔二郎はあれを探す。

「見つけた・・・」

そして、翔二郎はあれを見つけた。

雷都 某大学前の道路 22時00分

『ドゴオーン！』

「・・・雷か」

翔二郎は、あれを見つけてからこの大学に張り込んでいた。  
相変わらずレインコートを着て、電柱に隠れている。

「（雷都で大学が焼失していないのはここだけだ。だつたら、もうドーパントはここに来るしかない。・・・しかし、寒いな。

早く来てくれ。

ドーパントを倒す前に俺が風邪で倒れるぞ。

・・・！」

翔一郎が愚痴を言つてゐる間に、誰かが来た。その人物は、傘を差していて顔がよく見えなかつた。しかし、声が依頼人の水野亮に似ていた。

「大学なんて・・・消してやるー！」

「マグマー！」

「あいつか・・・」

翔一郎は、ガイアメモリの起動音を聞いた。

そして、人物は化物“ドーパント”に姿を変えた。

「全部燃やしてやるー！」

「はっー！」

「！？」

「だ、誰だお前！」

そう呟くと同時に、翔一郎は“マグマドーパント”に飛び蹴りした。

飛び蹴りを受けたにも関わらず、少しよろめいただけで全く痛みを感じた様子がないマグマドーパント。

それどころか、翔一郎に質問している。

「（やつぱり効いてねえな）

人に名前を聞くときは自分から名乗るものだぞ。

そうだろ水野武？」

質問を質問で返す翔一郎。

「……何故俺の名前を知っている!」

「（声が弟さんに似ていたから……とは言えないな）  
どうだつていいだろ。

それより、とつととメモリをよこせ

「嫌だね！」

「そうか……だつたら力づくで奪うしかないな」

「何言つてんだお前？

生身の人間がドーパントに勝てる訳が……

「そうだな。

だが、あいにくこっちもただの人間じゃないんでね

そう言つと、翔一郎はレインコートを放り捨て、懐から“ロストドライバー”とガイアメモリを取り出し、ロストドライバーを装着し、ガイアメモリを田の高さまで持つた。

そのガイアメモリには、『ロ』のアルファベットが刻まれていた。

「ディシジョン!」

「変身!」

「ディシジョン!」

ガイアメモリを起動させ、ロストドライバーに装填し、翔一郎は“変身”した。

「まさかお前……ドーパントだったのか！？」

同じガイアメモリを使ったことから、『ディシジョンをドーパント』と予想したマグマドーパント。

「残念ながら、その予想は外れてる。

俺は・・・“仮面ライダー”『ディシジョン』だ！」

そう答へ、『ディシジョン』は武器の大鎌“『ディシジョンサイズ』”をマグマドーパントに向け、こう言つた。

「さあ、お前の罪を審判するー！」

## 推理&アート・変身編（後書き）

犯人がマグマードーパントだった件について  
マグマだからすべ畠で消えてしまつといつシシ「ハハは無じの方向で  
お願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2612x/>

---

仮面ライダーディシジョン

2011年11月17日21時32分発行